

令和7(2025)年度  
文部科学省委託事業「青少年国際交流推進事業」

# 日韓高校生交流 事業報告書



# 目次

|        |   |
|--------|---|
| 事業全体概要 | 1 |
|--------|---|

## <派遣事業報告>

|             |    |
|-------------|----|
| 1. 参加者名簿    | 3  |
| 2. 日程       | 5  |
| 3. 派遣事業概要   | 6  |
| 4. 学習成果発表会  | 11 |
| 5. 参加者アンケート | 18 |
| 6. 事業後の成果発表 | 19 |
| 7. 引率者レポート  | 24 |
| 8. 成果と課題    | 26 |

## <受入れ事業報告>

|              |    |
|--------------|----|
| 1. 参加者名簿     | 29 |
| 2. 日程        | 31 |
| 3. 受入事業概要    | 32 |
| 4. 学習成果発表会   | 37 |
| 5. 学生サポーター感想 | 40 |
| 6. 成果と課題     | 42 |



## 事業全体概要

### 1. 事業趣旨

日本と韓国で共同開催された 2002 年ワールドカップサッカー大会成功を契機とした「日韓共同未来プロジェクト」の一環として、日韓両国の青少年を通じて友好親善を一層深め、国際的な視野と資質を持った青少年の健全育成を図るための青少年交流を推進し、両国において、日本語、韓国語を第二外国語として勉強する高等学校生の相互交流を図ることを目的とする。

### 2. 事業目標

相手国の文化や歴史を学び、異なる価値観や視点を尊重しながら、日本と韓国への理解を深め、将来両国の架け橋となるような存在を目指す。

### 3. 実施関係機関

#### (1) 主催

日本：文部科学省

韓国：国立国際教育院

#### (2) 実施

日本：独立行政法人国立青少年教育振興機構

韓国：株式会社インテリジェンス

### 4. 参加人数

日 本：37名、引率者5名

韓 国：37名、引率者5名、学生サポーター5名（日本人学生ボランティア）

### 5. 日程

#### (1) 派遣

事前研修                    8月 7日（木）    オンライン

派遣                         9月 8日（月）～9月12日（金）    5日間

#### (2) 受入れ

日本受入れ                 10月28日（火）～11月1日（土）    5日間



# 派遣事業報告



## 1. 参加者名簿

### 1) 参加者

|    | 氏名      | 学校               | 地域   |
|----|---------|------------------|------|
| 1  | 本 田 優 芽 | 北海道札幌国際情報高等学校    | 北海道  |
| 2  | 谷 地 爽 貴 | 岩手県立南昌みらい高等学校    | 岩手県  |
| 3  | 鈴 木 月 菜 | 秋田県立角館高等学校       | 秋田県  |
| 4  | 大 類 夕 波 | 山形県立北村山高等学校      | 山形県  |
| 5  | 安 達 結 愛 | 福島県立あさか開成高等学校    | 福島県  |
| 6  | 吉 成 沙 空 | 栃木県立黒磯南高等学校      | 栃木県  |
| 7  | 野 中 結   | 群馬県立前橋西高等学校      | 群馬県  |
| 8  | 金 原 珠 里 | 埼玉県立越谷南高等学校      | 埼玉県  |
| 9  | 風 見 英 翔 | 千葉県立柏井高等学校       | 千葉県  |
| 10 | 林 小 春   | 千葉県立流山おおたかの森高等学校 | 千葉県  |
| 11 | 佐 藤 隆之介 | 学習院高等科           | 東京都  |
| 12 | 北 村 美 佑 | 東京都立王子総合高等学校     | 東京都  |
| 13 | 高 木 千 広 | 神奈川県立横浜国際高等学校    | 神奈川県 |
| 14 | 石 田 夏 稀 | 神奈川県立横浜国際高等学校    | 神奈川県 |
| 15 | 西 巻 唯 笑 | 新潟県立新井高等学校       | 新潟県  |
| 16 | 竹 内 彩 来 | 富山県立伏木高等学校       | 富山県  |
| 17 | 前 澤 希 心 | 長野県長野西高等学校       | 長野県  |
| 18 | 山 田 羽 菜 | 岐阜県立土岐紅陵高等学校     | 岐阜県  |
| 19 | 古 市 奏 心 | 愛知県立尾北高等学校       | 愛知県  |
| 20 | 青 木 千 明 | 近江兄弟社高等学校        | 滋賀県  |
| 21 | 高 堂 果 歩 | 大阪府立長野高等学校       | 大阪府  |
| 22 | 高 見 優 杏 | 尼崎市立尼崎高等学校       | 兵庫県  |
| 23 | 西 岡 美 月 | 奈良県立国際高等学校       | 奈良県  |
| 24 | 西 山 葵   | 和歌山県立星林高等学校      | 和歌山県 |
| 25 | 二 岡 愛 美 | 松江市立皆美が丘女子高等学校   | 島根県  |
| 26 | 本 城 花 奈 | 福岡県立博多青松高等学校     | 福岡県  |
| 27 | 佐 藤 優 羽 | 大分県立大分西高等学校      | 大分県  |
| 28 | 樋 口 佑 月 | 大分県立別府翔青高等学校     | 大分県  |
| 29 | 丸 山 心 寧 | 鹿児島県立鹿児島東高等学校    | 鹿児島県 |
| 30 | 伊 地 康 高 | 沖縄県立名護高等学校       | 沖縄県  |
| 31 | 岸 本 涼 芳 | 沖縄県立名護高等学校       | 沖縄県  |

|    |         |               |     |
|----|---------|---------------|-----|
| 32 | 永 畑 陽 音 | 横浜市立横浜商業高等学校  | 横浜市 |
| 33 | 石 井 美 結 | 横浜市立横浜商業高等学校  | 横浜市 |
| 34 | 村 田 美 月 | 川崎市立橘高等学校     | 川崎市 |
| 35 | 磯 島 蘭   | 岡山市立岡山後楽館高等学校 | 岡山市 |
| 36 | 金 泉 莉 愛 | 広島市立舟入高等学校    | 広島市 |
| 37 | 長 谷 咲 穂 | 福岡市立福岡女子高等学校  | 福岡市 |

## 2) 引率者

|    | 氏名      | 所属                            | 役職 |
|----|---------|-------------------------------|----|
| 団長 | 松 浦 賢 一 | 国立日高青少年自然の家                   | 次長 |
| 引率 | 日比野 功 宣 | 国立大雪青少年交流の家                   | 係長 |
| 引率 | 高 橋 旺 子 | 国立青少年教育振興機構<br>青少年教育研究センター企画室 | 係員 |
| 引率 | 久保田 翼   | 国立青少年教育振興機構<br>総務部総務課         | 係員 |
| 引率 | 福 永 萌   | 国立吉備青少年自然の家                   | 係員 |

## 2. 日程

| 日数 | 日付           | 時間            | プログラム   |
|----|--------------|---------------|---|
| —  | 8月7日<br>(木)  | 午前<br>午後      | 事業概要説明 / 海外渡航説明<br>講義：「日韓文化交流の歴史と意義」<br>(一橋大学 准教授 権 容 爽 氏)<br>団ミーティング / 班ミーティング |
| 1  | 9月8日<br>(月)  | 午後<br>夜       | 仁川国際空港着<br>オリエンテーション  |
| 2  | 9月9日<br>(火)  | 午前<br>午後<br>夜 | 訪問：仁川万寿高等学校<br>〃<br>歓迎式（国立国際教育院）<br>買い物体験                                       |
| 3  | 9月10日<br>(水) | 午前<br>午後<br>夜 | 体験：World K-POP Center（ダンス体験）<br>訪問：東国大学<br>自由散策：明洞                              |
| 4  | 9月11日<br>(木) | 午前<br>午後      | 訪問：韓国民俗村<br>体験：「ハングルカリグラフィー体験」<br>学習成果発表会                                       |
| 5  | 9月12日<br>(金) | 午前            | 仁川国際空港発   |



日韓高校生交流事業日本団

### 3. 派遣事業概要

< 8月7日（土） >

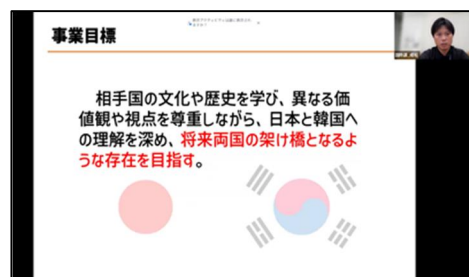
#### ○事前研修会

本事業の趣旨及び目的、プログラム内容を理解した上で研修に臨めるように事前研修会（オンライン）を開催した。事務局より概要説明を行うとともに、海外渡航が初めての参加者も多いことから、旅行会社による渡航説明が行われ、基本的な海外渡航知識を学んだ。

また、事前に韓国と日本のこれまでの文化的・社会的繋がりを把握するために「日韓文化交流の歴史と意義～日韓国交正常化60年を迎えて～」のテーマにて、一橋大学の権容奭准教授による講義を行った。参加者は戦前から現代までの日韓文化交流の変遷を学ぶことができた。

研修の後半には、団ミーティングと班ミーティングが行われ、団ミーティングでは団長が進行を担い、引率者及び全員の自己紹介・各係の役割の説明・発表テーマの確認等を行った。班ミーティングは各班に分かれて実施し、各班の引率者が進行を担い、1週間活動を共にする班員同士の自己紹介（参加動機や事前課題の共有含む）、班の目標・発表テーマの決定に向けディスカッションを行った。

事業本番に向けて引率者及び共に韓国で共に学ぶ仲間との交流を深め、事業へ臨む心構えや当日までの必要な準備を確認することができた。



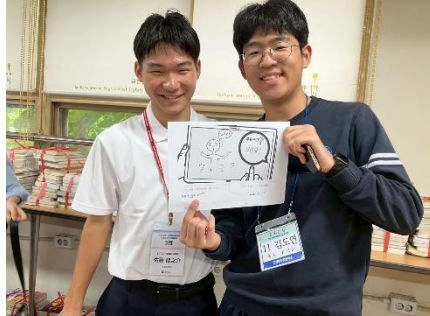
< 9月9日（火） >

#### ○高校交流【仁川万寿高等学校】

到着後すぐに万寿高校生徒によるキャンパスツアーが行われ、校内を見学した。その後の歓迎式では、日本団代表生徒による韓国語での挨拶の後、同校生徒有志によるバンド演奏やレクリエーションが行われ、盛大な歓待を受けた。その後は韓国人生徒とペアを組み、1日かけて交流した。事前に準備していたプレゼントを交換し、韓国語で自己紹介を行った後、昼から午後にかけてはペア生徒と共に授業体験（英語、運動と健康、数学等の9科目）、韓国遊び体験、SNSの絵文字スタンプ作成のワークショップ体験等、充実した時間を過ごした。

日本団生徒は様々な活動を通じてこれまで学習してきた韓国語に挑戦し、積極的にコミュニケーションを取る姿が見られた。想定より会話できず悔しかったという者もいれば、自分の話したことがしっかりと伝わったという者もあり、各生徒たちにとって貴重な体験となった。多くの生徒が、親睦を深めたペア生徒と連絡先を交換する様子が見られ、帰りのバスには見送りに来る韓国生徒が何人もおり、日韓両国の生徒にとって非常に充実した時間を過ごせたことが伺えた。





### ○買い物体験【Eマートショッピング】

Eマートショッピングでは、日本にはない珍しい商品に対して生徒たちが喜ぶ様子がみられた。各々が買いたい者を購入し、家族や友人などへのお土産で鞆が一杯になる生徒が多かった。



### <9月10日(水)>

### ○OK-POP体験【WORLD K-POP CENTER】

WORLD K-POP CENTERでは、K-POP体験の一つとして、韓流アイドルグループのダンス指導や振り付けを行う講師による本場のダンス体験を行った。日本団生徒は韓流アイドルが好きな者が大半であり、その指導を行うプロの講師からレッスンを受けることに気持ちが高まる様子が見られた。

レッスンは2グループに分かれて行われ、ダンスを習っている生徒は講師と積極的に韓国語でコミュニケーションを取っていた。約2時間に及ぶレッスン体験終了後には、センターの中庭で互いのグループで習ったダンスを披露し合った。本場の貴重なダンス体験を得られると共に、講師の韓国語を一生懸命にヒアリングし、学習する様子が多く見られた。



## ○大学訪問【東国大学】

東国大学では、日本語学科の大学生による企画運営にて交流を行った。歓迎式でのレクリエーションの後、2名の生徒によるキャンパスツアーが行われ、韓国の大学の様子を興味深く見学する様子が見られた。

ツアー後の大学生との交流では、会場の各机上に韓国のお菓子等のプレゼントが多々用意されており、日本団生徒は感激していた。多くの大学生が交流会に参加しており、日本団生徒は韓国語と日本語を駆使しながら、積極的にコミュニケーションを取っていた。どの大学生もとてもフレンドリーで、日本団生徒にとって優しいお兄さんお姉さんの存在として、笑顔で対話する場面が非常に多かった。交流後は多くの生徒から満足な交流ができたとの声が挙がっていた。



## ○自由散策【明洞】

明洞では各班が2グループに別れ、国立国際教育院職員、インテリジェンス職員、通訳、日本団引率者がそれぞれのグループに付き添い、自由散策を行った。レストランでサムギョプサル等現地の伝統料理を食べる班がある一方で、買い物をメインとして屋台での軽食にする班等、各グループの興味関心に合わせて自由に散策した。

日本団生徒は明洞での買い物や飲食の機会においても、韓国語を用いてお店のスタッフと積極的にコミュニケーションを取っており、日本語が分からないリアルな現地の韓国人に、自身の韓国語がどこまで伝わるか、身を持って挑戦することができていた。



<9月11日(木)>

### ○韓国文化体験【韓国民俗村】

韓国民俗村では、各々が自分で選択した韓服を纏い、韓国の歴史文化や慣習を通訳のガイドの解説を踏まえながら、古来の韓国文化を体験することができた。また生徒同士が韓服を着ながら、村内を見学したり、記録写真を取り合ったりしていたことも印象的だった。また韓国式の建物を観覧したりと、古来の韓国の伝統文化や生活様式、慣習も肌で感じることもできた。



### ○特別講義：ハングルグラフィィー【国立国際教育院】

ハングル書体の講義とカリグラフィィー体験が行われた。まず講師よりハングル文字の由来や仕組みについて学び、その後実際に墨と筆で文字を書く体験を通して、体感的にハングル文字の理解を深めた。最終的には、参加者がそれぞれ好きな言葉(フレーズ)を考え、白紙の扇子にハングルで文字を書き、各自の成果物として記念品(お土産品)を作成した。



### ○学習成果発表会

成果発表会では、班ごとに日韓の共通点や相違点を中心に、両国の未来のために自分たちが取り組みたいことをスライドにまとめ、発表を行った。高校生徒や大学生との交流、明洞散策、民俗村での文化体験等、研修での多様な活動を通して感じたことや考えたこと、気づいた新たな視点を成果報告しており、研修での学びが還元されていたのが好印象であった。

発表後の講評では、日本団長から「正しい認識を持つことができれば、自らの言葉で真実を語るができるようになる。そうした青年がまた一人また一人と増えていけば、志をともにした強力なネットワークが世界中に築かれ、現在の行き詰まりを打破する解決策が開かれると信じている。」と挨拶があり、「自らの言葉と行動で、仲間と考えたアクションプランをそれぞれの地において実現してくれることを期待している。」というメッセージが参加者へと届けられた。



## 4. 学習成果発表会

韓国での研修で実際に感じた日本との「共通点」「相違点」に着目するとともに、各班で着眼した内容について、パワーポイントを用いて発表を行った。

- 1) 1班：青木 千明、伊地 康高、本城 花奈、谷地爽貴、金泉 莉愛、山田 羽菜、樋口 佑月、石井 美結、竹内 彩来

### ①街中の相違点（日韓比較）

バスの速さ・バス停の構造が異なる

→ 韓国のバスは速く、停留所も効率的に設計されている。

食品ポストの有無

→ 韓国では街中に食品回収ポストが設置されている地域もある。

交通ルールの違い

→ 韓国はルールが明確で厳格、日本は柔軟で曖昧な部分もある。

### ②環境への取り組み（韓国）

Compost（生ゴミ堆肥化）によるリサイクル

→ 1995年から始まり、家庭や学校での分別・再利用が進んでいる。

### ③日本の学校の良いところ

先生と生徒の距離が近い

→ 授業中や休み時間でも気軽に話せる雰囲気がある。

交通ルールが控えめ

→ 柔軟な対応が可能で、状況に応じた判断がされることが多い。

### ④韓国の学校の良いところ

ICT環境が整っている

→ 授業でハイテクなコンピュータや電子黒板を活用。

グループ体制が基本

→ 最初からグループで活動することで協働学習が促進される。

動画サイトを活用した授業

→ 数学の公式や解法を動画で説明し、視覚的に理解を深める。

校長先生の発表時に生徒が称える文化

→ 礼儀や尊敬の気持ちを表す場面が多く、学校全体の一体感がある。

#### ⑤学習環境の違い（日本の課題点）

日本：静かな個別学習スペースが不足

→ 自習室やブースの数が限られており、集中しづらい場面も。

韓国：集中できる学習環境が整備

→ 個別ブースや静かな空間が多く、受験勉強に適している。

2) 2班：永畑 陽音 西岡 美月 鈴木 月菜 北村 美佑 高堂 果歩 石田 夏稀  
古市 奏心 野中 結 村田 美月

#### ⑩発表の主題

- ・韓国文化に直接触れてみたからこそ見えた日韓の共通点と相違点、それぞれの文化の良さを発表することとした。
- ・主題の設定理由は、未来を考える上でお互いの性質を理解することが重要であると考えたためである。
- ・日韓高校生交流事業では、「韓国を知り、日本を伝える」ことを事業期間での一貫した目標として臨んだ。

#### ①社会文化（学校生活）に関する共通点・相違点

- ・共通点は、「購買がある点、黒板や電子黒板を使って授業をしていた点」だと体感した。
- ・相違点は、「学校を外履きのまま出入りしていた点、制服の指定が少ない点」だと気づいた。
- ・現地高校生との交流を通して、共通点・相違点をたくさん見つけることができた。

#### ②伝統衣装に関する共通点・相違点

- ・共通点は、「スカートタイプになっている点、衣装の色・形によって込められている意味が変わってくる点」だと考えた。
- ・相違点は、「パニエがある点、通気性がある点、女の子のチマが日本より韓国の方がドレスに近い点」だと体感した。

#### ③食文化に関する共通点・相違点

- ・共通点は、「お箸を使用する点、米が主食である点」だと考えた。
- ・相違点は、「おかずの数が多いい点、お皿を持ち上げない点」だと体感した。

#### ④改めてみる日本の良さ

- ・敬称

相手への敬意を示し、良好な人間関係を築くことができる。

- ・侘び寂び

不完全なものを否定的にとらえず、自然や時間の経過によって様々な変化に美しさを見出し、生まれた静寂を受入れ、深く味わうことが「詫び寂び」という考え方であることを改めて学んだ。

この考え方が、「社会的なつながり」や「共感を深める土壌」につながっていたのだと気づいた。

### ⑤ 韓国の良さ

- ・韓国の人々の人柄。

現地高校訪問時や研修中のサポート、お店の方々の人柄に助けられる場面が多くあった。その背景には、「情の文化」があるのだと考える。

- ・K-POP やドラマといったポップカルチャーを含む文化コンテンツの力の魅力。

日本の学生の学習のきっかけとなっており、言語や国境を越えて人と人をつなぐ韓国の文化コンテンツの力を改めて感じたと同時にデータを根拠に学んだ。

### ⑥ 課題認識

- ・フードロスが多いこと

韓国では食べ物を残すのが礼儀になっていることを知ったが、世界的課題としてフードロスに取り組む必要があるのではないかと考えた。

※発表後韓国側より補足説明あり。

今は料理を残す文化はない。かつて朝鮮時代は、残った料理をスタッフが食べられるように生まれた文化で、今は残さず食べるとのこと。

- ・授業への積極性に違いがあること

現地高校生と授業を受けて、自分の思ったことを伝える形式となっており、現地高校生の授業への積極性を感じた。日本では、先生や発表者の話をよく聞いているが少し消極的になっていることがあるので、私たちの今後の課題であると考えた。

### ⑦ アクションプラン

- ・フードロスについては、取り分けを自分で行うことによってフードロスを軽減できるということを提案した。

- ・自分自身も韓国の生徒のように積極的な発言を行うことによって、学習内容に対する理解が深まるとともに自分の意見を人前で伝える自信を身に付けていきたいと感じた。

#### ⑧まとめ

- ・様々な体験を通して日韓の共通点と相違点、それぞれの文化の良さを学んだ。相手のことを大切にする韓国の文化である「情文化」を知り、「情文化」に触れ、文化の良さを知ったので、日本文化だけではなく韓国文化の良さをさらに知り、発信していきたい。

3) 3班：丸山 心寧、安達 結愛、西巻 唯笑、高木 千広、西山 葵、佐藤 隆之介、  
金原 珠里、前澤 希心、岸本 涼芳

#### ①日本の課題点

- ・教育に係るお金（給食費、制服、授業料）は、自己負担。  
→韓国は、国からの支援があり、自己負担が少ない。
- ・交通料金（タクシー）の料金が、日本は初乗り700円程度で高い。  
→韓国は500円程度と若干安い。

#### ②韓国が改善するとよくなる点

- ・タバコのポイ捨て（世界中でも起きている）
- ・バリアフリーの少なさ

#### ③日本の良い点

- ・マナーや礼儀正しさ、サービスの丁寧さ
- ・衛生面（ポイ捨てが無い、公共トイレがきれい）
- ・治安の良さ（犯罪率が比較的低い、落とし物は持ち主に戻る）
- ・大衆文化（アニメ、ゲーム、音楽、食べ物などの日本文化）

#### ④韓国の良い点

- ・交通の便の良さ（バスや地下鉄が便利、バスは色分けされている）
- ・Kカルチャーの影響力（K-POP、ファッション、食文化、美容文化）
- ・日本語対応（多くの店員や学生が日本語対応できる、町中にも日本語の看板あり）

#### ⑤日韓の相違点

- ・食文化（特に学食）  
韓国：ステンレスのお皿に、ご飯やスープ、キムチを乗せてもらう。  
辛いもの・発酵食品多い  
日本：パンやごはん、牛乳など、味があっさりしているものが多い
- ・公共交通機関

韓国：バスの利用率高い。

日本：電車や地下鉄が中心で、バスは補助的な役割

・ 正装

韓国：旧正月や結婚式等では、ふんわりしたスカートが特徴のチマチョゴリ

日本：成人式や正月では、帯でしっかり結んで、落ち着いた印象のある着物

⑥日本が取り入れた方がいい韓国のいいところ・もの

・ トイレのハンドペーパー（衛生的）

・ 会計待ちの列にも商品が陳列されている

（取りに戻ることが無い、長時間の待ちでも楽しめる）

・ 信号待ちの時間表示

・ 立って授業を受けられる机（居眠り防止、前席者が高身長等であっても、問題なし。）

⑦韓国が取り入れた方がいい日本のいいところ・もの

・ サービスの丁寧さ、「おもてなし」文化

・ 公共の場でのマナーと清掃（ポイ捨てなし）

4) 4班：林 小春、本田 優芽、二岡 愛美、大類 夕波、吉成 沙空、風見 英翔、磯島 蘭、  
長谷 咲穂、高見 優杏、佐藤 優羽

①日本の高校生から見た韓国の大学について

・ 東国大学について、1906年に創立され、2002年に新設された。韓国の中でもトップクラスの私立大学の1つで、仏教系の大学・大学院である。

・ 大学の講義では、韓国側の日本の印象が初めてネガティブからポジティブな割合が増えた。韓国人の日本への好感度は2019年12.3%、2025年は63.3%と5倍に増えた。

・ 日本のニュースでは韓国を否定的に捉える表現が多いが、日本人はK-pop、韓国人は日本のアニメゲームなどがブームであり、訪日韓国人も増えている。

・ 東国大学を訪れての感想は、ドラマなどでみていたパリパリ文化はあまりなく、優しい学生が多かったように感じた。

②日本と韓国の学生の違いについて

・ 日本の制服はフォーマルタイプが多く、体操服と制服が分かれている事が多いが、韓国は制服と体操服が一体化したカジュアルで動きやすい服装で、着替える必要がない。

- ・日本では先生と生徒が日常的な会話や雑談をすることはあまり多くはないが、韓国ではまるで友達のように接していた。例えば先生の事を実際にお姫様と呼んでいる生徒もいた。
- ・日本ではクラスメイトや部活動などの共通の集団で遊んだり話したりすることが多いが、韓国ではそれに囚われず、より多くの友達と接している姿が伺えた。

### ③韓国の高校・大学の設備について

- ・学校の作りは日本と同じであった。
- ・授業を行う部屋が多い。例えば図書室で授業をしていた。
- ・個別塾や図書館にあるような勉強スペースがあった。集中しやすい環境があり、日本も導入すれば勉強により熱中できると思った。
- ・韓国は日本よりより勉強熱心だと伺っていたが、直接体験をする事でより実感をする事が出来た。
- ・日本では教科ごとに設備の整った教室で授業が行われるのに対し、韓国では授業や集会に使う部屋が多く、毎時間異なる環境で学ぶことで集中力が持続しやすいと感じた。
- ・日本は部活動が盛んで体育施設が多く、韓国は勉強を重視して学校設備が整っていることが分かった。

### ④韓国の高校の授業について

- ・真面目ながらも話しやすい雰囲気がある。
- ・先生と生徒との仲が良く終始和やかな空気が流れている。
- ・授業方式は日本の高校との違いはあまりなく、ICT教育を活用しながら進行され、プリントを用いることもある。
- ・授業中に眠くなったら自発的に立って勉強ができる、高さのある机が用いられている。学習意識の高さが伺えた。
- ・一方で日本の授業の落ち着いた雰囲気や先生生徒間の礼儀正しい関係性も大切にしていきたい。

### ⑤韓国の高校の給食について

- ・韓国の給食は量が多く、野菜がたくさん入ったおかずが多い。1年生から3年生まで集まって食べるので、食堂が活気にあふれていた。
- ・日本は韓国と違い、給食ではなくお弁当を食べることが多い。お弁当は好きな場所で食べることができるため、特定の少人数で集まって食べることができて、周囲の事を気にせず様々な会話をして、友達との距離を縮めることができる。

⑥まとめ

- ・5つの視点から日本と韓国の相違点について検討したが、全てにおいて違いがみられた。
- ・どちらが優れているではなく、お互いの良い部分を取り入れる姿勢が大切である。



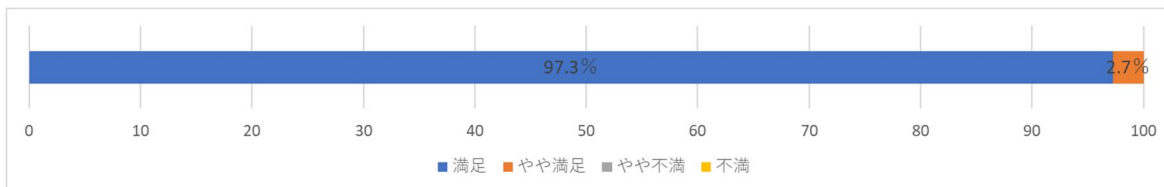
学習成果発表会



修了証授与式

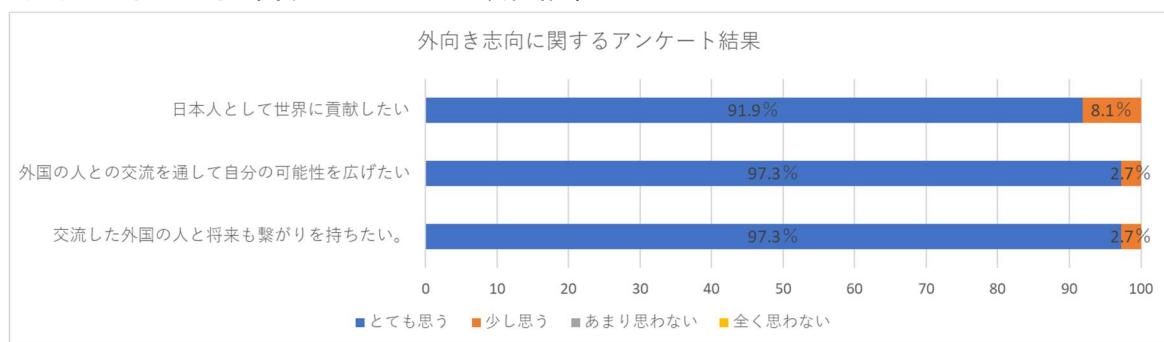
## 5. 参加者アンケート

### (1) 事業全体の満足度



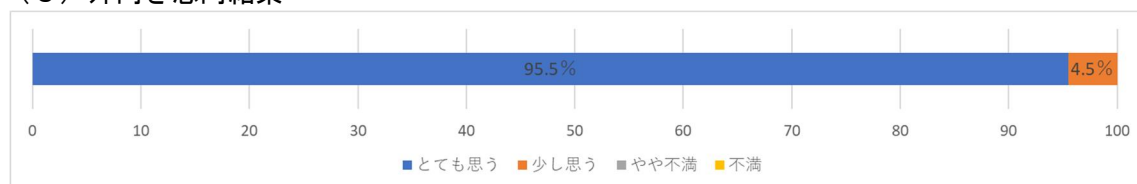
「事業全体の満足度」に対する回答は、「満足」が97.3%、「やや満足」が2.7%となり、派遣者37名全員から肯定的な回答を得ることができた。

### (2) 外向き志向に関するアンケート項目結果



全項目で最上位の「とても思う」を90%以上獲得し、参加者全員から肯定的な回答を得ることができた。特に「日本人として世界に貢献したい」項目については、前年度結果（とても思う：64%）より27.9%上昇した。

### (3) 外向き志向結果



最上位項の「とても思う」が95.5%以上の数値となり、前年度事業の結果（83.3%）より12.2%も上昇し、高水準の結果を得ることができた。

#### 【外向き志向とは】

文部科学省の定めた調査項目3項目「日本人として世界に貢献したいと思いますか?」「外国の人との交流を通して自分の可能性を広げたいと思いますか?」「交流した外国の人と将来も繋がりを持ちたいと思いますか?」のアンケート結果を集計したものである。国立青少年教育振興機構では、それらの問いに対して肯定的な回答の合計が80%以上を得ることを目標とし国際交流事業を行っている。

## 6. 事業後の成果発表

日本人参加者には、本事業終了後の課題として各自で学んだ成果について各所属校の生徒に向けて、発表することを求めている。以下は報告例（抜粋）である。

1)

|        |   |
|--------|---|
| 日時     | 2025年11月19日（水）  |
| 会場     | ホテル(修学旅行の際)   |
| 参加人数   | 103人  |
| 主な発表内容 | <p>○派遣事業の概要</p> <p>「この交流事業は、9月8日から9月12日までの5日間で行われ、8月7日に事前研修がありました。事業の目標は、相手国の文化や歴史を学び、異なる価値観を尊重しながら日韓の理解を深め、将来両国の架け橋となるような人材を育てることです。日本からは「訪韓研修生」として私たちが参加し、韓国からは「訪日研修生」として日本に来る形で相互交流が行われました。</p> <p>また、この事業は2002年の日韓ワールドカップ共同開催をきっかけに始まった日韓共同未来プロジェクトの一環で、両国の青少年交流を通じて友好を深め、国際的な視野を養うことを目的としています。</p> <p>○特に印象に残った活動</p> <p>仁川にあるマンス高校の訪問が1番印象に残っています。1日マンス高校で過ごし、まずキャンパスツアーで校内を案内していただいた後、歓迎式やレクリエーションを一緒に楽しみました。体験授業では、日本の高校生1人に対して韓国の高校生1人がペアになって付き添ってくださり、社会・数学・英語・日本語・体育など、様々な授業を受けました。</p> <p>私は韓国史の授業に参加しましたが、授業特有の用語も多く、韓国語としては少し難しかったものの、ペアの生徒が翻訳しながら説明してくれたり、先生もわかりやすい表現で話してくださったので、楽しく授業を受けることができ、とても貴重な経験になりました。</p> <p>また高校の中で特に驚いたのは、自習室の充実度や、眠くなった時に立って勉強できるスタンディングデスクが置かれていたことなど、学習環境が非常に整っていたことです。</p> <p>韓国の高校生活を肌で感じることができ、普段の旅行や語学留学では決して得られない貴重な経験になったと思います。</p> <p>○まとめ・感想</p> <p>① 情の文化</p> <p>成果発表でも班でこの文化を取り上げましたが、今回の交流を通して韓国の人々の「情」の深さを強く感じられたと思います。交流の際、緊張していた私を現地の高校生や大学生の方々が温かく迎えてくださり、スタッフの皆さんもとても親身に接してくださったことが印象的でした。</p> <p>実際、今でも仲良くなった学生の方々とSNSで連絡を取り合い、互いに韓国語や日本語を教え合っています。今回の経験を通して韓国の情文化に直接触れることができ、さらに韓国が好きになりましたし、この文化は実際に現地に行ってみて初めて分かる、韓国ならではの大きな魅力だと感じました。</p> <p>② 文化コンテンツの魅力</p> <p>交流に参加した多くの日本の高校生が、K-POPや韓国ドラマなどの韓国文</p> |

化をきっかけに韓国に興味を持っていました。同じように、韓国の高校生や大学生の中にも、日本のアニメやキャラクターなどを好きになったことから日本語を学び始めた方が多くいました。

また、大学での講義も韓国の文化産業が大きく成長していることを知り、「文化」が日韓関係においてどれほど重要な役割を果たし、国と国をつないでいるのかを学び、実感することができました。

最後に、私は今回の事業に参加できて、本当に良かったと感じています。私は韓国を訪れるのが今回で5回目でしたが、これまでの旅行などでは気づけなかった韓国の魅力を、実際に韓国の高校で1日を過ごし、班の仲間と協力しながら5日間活動する中で深く知ることができました。温かい情文化に触れ、韓国への思いはさらに強くなったと思います。

また、この事業への参加は私にとって大きな挑戦でもありました。中学生の頃から韓国が好きで、毎日 YouTube やドラマを見たり、自分でハングルを勉強したりしてきたからこそ、この事業に参加できたことが本当に嬉しかったです。普段はみんなの前に立ってまとめることが得意ではない私ですが、今回は班長を務め、韓国語の面でも班を支えられたことで、大きな自信につながりました。

将来私は韓国の大学への進学を考えていますが、挑戦すること、「韓国が好き」という気持ちを忘れず、必ず日韓の架け橋となる人材になりたいです。地理的にも近く身近に感じる国ですが、ポップカルチャーだけではない韓国の魅力も、これから多くの人に伝えていきたいと思います。

この事業に携わってくださった関係者の方々、現地の学生の皆さん、そして一緒に頑張った班の仲間など、多くの支えがあってこの経験が実現しました。貴重な経験と素敵な思い出を、本当にありがとうございました。

○発表方法:スクリーンにスライドを映しながら説明する  
対 象:高校2年生

2)

|        |   |
|--------|---|
| 日時     | 2025年10月8日(水)   |
| 会場     | 大教室(多目的教室)  |
| 参加人数   | 105人  |
| 主な発表内容 | <p>○派遣事業の概要</p> <p>本と韓国で共同に開催された2002年サッカーワールドカップ大会成功を契機とした日韓共同未来プロジェクトの一貫である。2004年に相互交流を開始して以来、2千人余りの高校生が往来した。現地の高校や大学を訪問して学生さんと交流をし、民俗村訪問やK-POP体験をして韓国の文化を実際に肌で感じる。</p> <p>○特に印象に残った活動</p> <p>高校生との交流が特に印象に残っています。私自身英語圏の同世代との交流は何回かありますが、韓国との高校生は初めてで、行く前は緊張していました。しかし教室に入った時に挨拶をした時に歓声が上がって少しびっくりしましたが、少し緊張がほぐれました。現地での授業は日本ではなかなかないMBTIに関する授業の内容で、ペアが優しく教えてくれたため、安心して授業に参加することができました。実際に同世代の韓国の方と韓国語で会話することが初めてでしたが、思ったより話すことができ、自分の韓国語が現地で通じた時の喜びは忘れません。先生に写真の許可を取る時に韓国語で話した時にクラスの子たちからの歓声が上がって自分の韓国語は現地で通じるんだと実際に感じる事ができてモチベーションが上がりました。ペアが日本語を頑張る姿や、自分のリュックサックを持ってくれる等の気遣いにとっても安心しました。韓国ドラマの世界でしか見たことない日韓の学校の違いを現地で感じる事ができていい経験になりました。</p> <p>○まとめ、感想</p> <p>4泊5日という短い時間でしたが、実際に行って、街を歩いて、体験して、現地の人と交流することで発見したことがたくさんありました。また、その国の言語を学び、その言語を使って現地の人と会話をするということも、今翻訳機がスマホのアプリとして入っているのに、その国の言語を学ぶ理由は心同士がつながることができるからではないのかなと思いました。実際、私は交流した韓国の高校生とはインスタグラムを交換し、今でも連絡を取り合っています。これは、私が韓国語を喋ることができ、会話し、心が通じ合えたから今でもできていることではないのかと思っています。今の時代、スマホ一台さえあれば画面上ではどこの国にも行けることができます。調べたらなんでも出てきます。でも、今回の事業を通して感じたことは、実際に行かないとわからない小さな文化の違いがたくさんありました。飛行機で2時間ちょっとの国でも、こんなにたくさんの相違点がありました。地球の反対に行くとうなるのでしょうか。そう思うと、もっといろんな国に行ってみたいと感じることができました。</p> <p>今回の事業に参加して私はとても良かったなと思いました。韓国の友達や、日本の友達など仲良くなった人たちが何人もいます。そして、観光ではできない経験がたくさんできました。これは、私の一生のうちの大切な思い出の一つです。このことから、私は何にでも挑戦する、興味があるなと思ったならやってみる。ということが大切ということがわかりました。これからの人生も何にでも挑戦という気持ちで色々なことに挑戦していきたいなと思いました。</p> <p>○発表方法：学校の説明会 対象：中学生とその保護者</p> |

3)

|        |   |
|--------|---|
| 日時     | 2025年10月31日(金)  |
| 会場     | 体育館   |
| 参加人数   | 約1000人(全校生徒)  |
| 主な発表内容 | <p>○派遣事業の概要</p> <p>4泊5日の韓国での活動(漢服体験、kpopculture体験、学校訪問 etc) から、現代韓国文化から、韓国の歴史に触れ、今後、日韓関係はどのようにしたら発展できるのか成果発表をしました。また、現地の韓国人とコミュニケーションをして、積極的にコミュニケーションをとれた。</p> <p>○特に印象に残った活動およびまとめ</p> <p>私はこの事業での経験を通じて、韓国社会の様々な面に触れ、近くて遠い国だと改めて感じました。</p> <p>まず、仁川万寿高校の訪問では、現地の高校で生徒さんたちが自主的に立って勉強する「スタンディングデスク」に驚きました。授業での積極的な発言や、学業関連の部活動から、教育を重視する文化が強く伝わりましたが、一方で塾通いのプレッシャーやメンタルヘルスの課題も聞き、学歴社会の厳しさを痛感しました。この経験から、教育の負担を軽くする支援が必要だと考えました。</p> <p>次に生活文化面では、エレベーターのボタンが連打される様子から、「パリパリ文化」の速さを体感しました。信号の秒読みやカード決済の便利さ、強い仲間意識を表す「ウリ」の言葉遣いに、互いに支え合う温かさを感じました。</p> <p>明洞散策では、どのお店でもキャッシュレスで素早く払う方が多く、キャッシュレス比率99パーセントの韓国の先進性に驚きました。またフードデリバリー店の多さも印象的でした。</p> <p>最後に KPOP ワールドセンターと東国大学でのお話では、K-POP やドラマが日韓の架け橋だと学びました。東国大学の教授のお話や、韓国の高校生が日本語でアニメを語ってくれた場面から、エンタメが互いの国を知るきっかけになると感じました。そして、その日は kpop ダンスを楽しんだ後に東国大学の教授の話聞いたことで、KPOP が一つの産業である。と言った、いつもとは違った視点で、興味を持ちました。</p> <p>このように日韓関係は発展していますが、私がこの交流で考えた課題を4つ挙げます。</p> <p>1つ目は、政治への若者の関心がまだ少ないことです。文化交流の楽しさは共有しやすいですが、政治の重要性を若者がもっと実感できる機会が必要だと思います。</p> <p>2つ目は、日韓の協力事業や社会のつながりがあまり注目されていない点です。例えば、この交流プロジェクトのように、若者が直接出会うプログラムはとても効果的ですが、学校やメディアであまり取り上げられていない印象です。もっと成果を共有できれば、みんなの意識が変わり、日常的なつながりが強まります。</p> <p>3つ目は、歴史や政治の話題が重く感じてしまうことです。</p> <p>4つ目は、エンタメの楽しさが表面的になりやすいことです。K-POP が好きだから韓国が好き、というところで終わらず、もっと社会の背景や歴史に興味を持ってほしいのにと感じました。実際、韓国の高校生が日本のアニメを通じて日本語を学んでいたように、エンタメを起点に広がっていくと、理解が深まると思います。</p> |

|  |  |
|--|--|
|  | <p>これらの課題を解決するには、私たち若者がエンタメから入って、少しずつ深い理解を広げていくことが大事だと思います。私はこの交流で、韓国の人々の温かさに触れ、国際交流の大切さを実感しました。今後、自分も日韓の架け橋になるよう、勉強と交流を続けていきたいと思っています。</p> <p>○発表方法:スクリーンにスライドを映しながら説明する<br/>対 象:全校生徒</p> |
|--|--|

## 7. 引率者レポート

### 1 班リーダー 福永 萌（国立吉備青少年自然の家 企画指導専門職付係員）

「心の交流」

4泊5日、日本の高校生たちが異国の地で成長する姿を間近で見ることができた。高校訪問では、同世代の韓国の生徒と学校生活を送り、日本で一生懸命学んできた韓国語を使って、楽しそうにコミュニケーションをとっている姿が印象的だった。「ほとんど翻訳機を使わずに話せたことが嬉しかった」、「思っていたより全然話せなかった」など、彼らの感想や表情一つひとつから、努力や喜び、悔しさが伝わってきた。本事業に対する思いが垣間見えた瞬間だった。高校からの帰りのバスでは、日本人を走って見送る韓国人生徒と、別れを惜しむ日本人生徒の姿が心に残った。普段より言葉が伝わりにくいからこそ、意思疎通が取れた時の喜びや感動は大きく、日韓の高校生同士が深く交流ができた時間になったのではないだろうか。

韓国に強い関心を持ち、全国から集まった高校生たちは、この5日間を決して忘れることはないだろう。帰りの空港へ向かうバスの中で、涙を流しながら「まだみんなと過ごしていたかった」「みんなと韓国に来ることができて良かった」と語る高校生をみて、改めてそう思った。

### 2 班リーダー 高橋 旺子（青少年教育研究センター企画室 総務係員）

「交流を通して見えた学びの広がり」

交流事業の参加前は、「韓国語でコミュニケーションをとって、自分の実力を再確認し韓国語を勉強するモチベーションをあげたい」や「語学力を身に付けて韓国語を使っていけるようになりたい」といった言語力の向上を目的としている生徒が多かった。

しかし終了時は、韓国語の更なる学習はもちろん「日本の文化や歴史について説明できるように勉強したい」といった自国発信の観点、「これからもたくさんの人と会話をして、文化や各個人の個性の違いについて理解を深めたい」といった文化や個性理解の観点など見方の広がりを感じた。

本事業の引率を通して最も嬉しかったことは、「参加者が人とかかわりを持つことや人との会話を通して交流することに前向きになったこと」、「その経験を将来につなげていくために行動しようとしていること」だ。これらは、交流事業に参加したいと一歩踏み出したことや班同士の助け合い、事業運営に携わってくださった方々のサポートなど、様々な要素があったからこそ生まれた本事業の大きな成果だと考える。

参加者が、今回の事業を通して、新たに気づいた、さらに磨かれた国際的視野を持って、一層成長していく姿を今後も応援したい。

### 3 班リーダー 久保田 翼（総務部総務課 総務係員）

『リアル（対面）』だからこそ」

4泊5日の「リアル(対面)」の交流を通して、日本の高校生だけでなく、我々リーダーも大きな刺激を受けた。

過去に韓国に数多く渡航しており、研修に対してワクワクする生徒がいる一方、これまでに勉強してきた韓国語でどれだけ会話ができるのかなど、成田国際空港での集合時、高校生たちは様々な感情を抱えていた。

結果としては、高校生からの感想は大変満足というものばかりであった。仁川万寿高等学校や東国大学、明洞市内の散策、K-POP 体験など、思い出に残ったプログラムは様々であった。担当した班の生徒から、仁川万寿高等学校訪問後に「同世代の生徒との国際交流は貴重ですね。」と言われたことが印象に残っている。コロナ禍による社会的制約やオンライン普及に伴い「リアル」な体験が減ってきているからこそ、彼らにとってはたくさんの成果をもたらしたのではないだろうか。

成田国際空港での解散時、5日間をともにした仲間との別れに、涙を流す生徒も多くみられた。その仲間とともに、これからの「日韓の架け橋」になってくれることを願うとともに、自分自身、本事業に関われたことを大変光栄に思う。

### 4 班リーダー 日比野 功宜（国立大雪青少年交流の家 管理係長兼総務係長）

「人生は不可逆的である。」

1つ目に「参加者の『知的好奇心』が異常なほど高い。」今回の国際交流事業で私が一番に感じた感想である。高校生という人生で最も多感な時期に、今回の経験ができたことは、かけがえのない財産になったことであろう。どの参加者も「韓国」という主題に対して、執拗なまでに興味関心を示し、学びたい・知りたいという意欲が溢れ出ていた。

2つ目に「人生は不可逆的である。」今回の事業で私が一番考えさせられた言葉である。人生は一度始まると二度とやり直したり、過去に戻したりできないという意味である。人生は一度きりだから、今できる最善を尽くすに越したことはないと思う。参加者たちと接する中で、今だからできることを全力で取り組む姿に感銘を受けた。

巷では「体験すること」の意義の再確認が行われている。当機構も体験することの重要性を様々な場面で謳っている。様々な場面で発達段階に応じた多様な体験をし、それらの経験を通じて心身ともに健全な人間形成を支援していくことが大切である。

今回の事業は正にこの言葉が体現された国際交流事業であったことは言うまでもない。それは参加者自身が一番わかっている。「身をもって知った」ことであろう。

## 8. 成果と課題

団長 松浦 賢一（国立日高青少年自然の家 次長）

### 日韓国交正常化 60 周年

今年 2025 年は日韓国交正常化 60 周年の佳節を迎える意義深き年。この 60 年の間、両国の関係には様々な局面があった。一方、官民双方では様々な交流・協力が積み重ねられ、2024 年には両国間の相互の往来者数が 1,200 万人を超え、過去最多を大きく更新した。

この 60 周年という節目の年を通じて、文化や芸術、学術、スポーツ、社会など幅広い分野で国民間、特に日韓関係の未来を担う若者の交流が更に活発となり、両国国民の間の相互理解がより一層深まることが期待される。そのような中、今回 37 名の高校生が、日頃の韓国語学習の成果を発揮すべく、交流事業に参加した。

### 「目的」と「目標」

今年のテーマは、「日韓友好の重要性～交流から学んだ、共に歩む未来～」。今後の更なる日韓友好のために、未来志向で、今後「どうしていききたいか」「こういったことができたかどうか」をまとめ、成果として発表することが求められた。

オンラインによる事前研修会では、「目的」と「目標」の違いを確認。「目的」とは、成し遂げようとする目指す事柄であり行為の目指すところ。一方「目標」とは、目的を達成するために設けたためあて。各班の目標設定にあたっては、次のことも確認した。

- ・ 目標は、目的達成のために立てる
- ・ 目的という階段の一段一段をあげるために目標を立てる
- ・ 目標は、誰でも分かるように具体的な言葉で立てる
- ・ 目標は、達成するために立てる（達成できない目標は立てない）

さらに、3 人のレンガ職人の話を通して、目的意識の重要性を確認し、後世に残る事業に加わり、世の中に貢献しようと呼びかけた。

### 韓国は「文化大恩」の国

海を挟んで隣り合う韓国と日本には、人と文化、モノが盛んに行き来した長い交流の歴史がある。島国・日本が、韓国から受けた「文化の恩恵」は計り知れない。

仏教は韓国を通して日本に伝わり、多くの文化的影響を受けた。韓国では 372 年に大学が創設され、教育に貢献していた。日本の大学設立は 8 世紀で 300 年以上遅い。このような面も日本は韓国から多くのものを学んだ。一方、両国は長い間「近くて遠い国」といわれてきた。

しかし近年では、活発な文化の交流を通じて、若い世代を中心に相互の親近感が増している。1998 年の「日韓共同宣言」の後、韓国では、日本の漫画や音楽、映画など大衆文化

の開放が進んだ。日本では2003年頃に韓流ブームが始まり、近年もK-POPグループやドラマの人气が高まり、今回参加した日本の高校生の多くも、そのような韓国の文化に触れ、韓流愛を抱きながら韓国を訪問した。

### リアルで多彩な交流プログラム

今回のメインプログラムともいえるのが、仁川万寿高校での交流である。熱烈な歓迎式に始まり、クイズや授業参加、給食、文化交流など多彩なプログラムが企画され、日韓の高校の違いを自らの体験を通して知る機会となった。さらに、日韓の高校生がペアとなる「トモトモ」を通して、互いにコミュニケーションを取る機会が増え、両者の友好が深まり、語学力のアップにもつながったに違いない。

東国大学校訪問では、日本語を学ぶ大学生のエスコートでキャンパスツアーが行われた。また、高校生2人に日本学科の大学生1人がアシスタントでつき、互いの言葉と文化を教え合いながら楽しく交流活動が行われた。さらに、日本学科の宋政炫教授の講義「日韓文化コンテンツ産業の貿易及び文化交流の動向」を通して、両国の文化交流の歴史や動向などについて学びを深める機会となった。

学校訪問のほかにも、K-POPダンス体験や韓服体験、ハンゲルのカリグラフィー体験、韓国料理など、本物の韓国文化に触れることにより、さらに韓流愛が深まったのではないかと思う。

### 実践のアリーナにおける真正の学び

今回の韓国での交流プログラムにおいて、高校生には可能な限り、実践のアリーナ（本場）において韓国語を使う機会を意図的に多くするようにした。そのため、訪問先での高校生代表挨拶は、韓国語に挑戦してもらい、最終日の成果報告会においても、高校生自らが日本語と韓国語を使って発表するようにし、いずれも通訳士を介すことなく行った。時には、韓国語を話せない引率団の通訳を担ってもらう場面もあるなど、高校生の活躍には目を見張るものがあり、見事に期待に応えてくれた。

5日間の研修はあっという間であったが、成果報告会における各班の発表からは、現地の人々や文化に直に触れ、様々な交流活動、文化体験活動等を通じて、両国の共通点や相違点を体感し、韓国の良さや自国の良さ、また逆に課題を認識できたことが伝わってきた。

### 絆を深めた仲間と「共に歩む未来」に向けて

参加者へのアンケート調査の結果からは、高校生にとって、決して観光では経験できない学びの多い充実した研修になったことが明らかになった。その要因の一つとして、寝食を共にしながら学び合った仲間の存在も大きいと考える。日本各地から集った仲間との絆が深まり、国内外に友人を作れたことへの感謝の気持ちを表す参加者が多く、成田国際空港での解団式では別れを惜しんで涙を流す人がいたのが印象的だった。

正しい認識を持つことができれば、今度は自らの言葉で真実を語れるようになる。そうした青年が、一人また一人と増えていけば、志を共にした強力なネットワークが世界中に築かれ、現在の行き詰まりを打破していく解決策が開かれると信じる。

今回経験して学んだことや育んだ友情を大切にしながら、自らの言葉と行動で、仲間と考えたアクションプランをそれぞれの地において実現し、共に歩む未来に向けて前進していってくれることを期待する。

#### タイトなスケジュールを乗り越えて

課題を挙げるとすれば、訪韓直前に韓国で政権交代があり、直前まで韓国側のエージェントやスケジュールが確定しなかったこと、さらに当日のスケジュールがタイトであったため、成果報告会に向けた各班の話し合いの時間が十分に確保できなかったことである。このような状況にも関わらず、全員が病気やケガなどのアクシデントもなく無事故で帰国できたことは幸いである。高校生のサポートをしてくださった各班のリーダーの皆さんに感謝を申し上げたい。

#### 日韓友好の架け橋に

出発直前の8月23日、韓国のイ・ジェミョン（李在明）大統領が訪日された。日韓首脳会談において、両政府は17年ぶりの「共同文書」を発表し、「未来志向の協力」を進めることが確認された。両国間で良好な関係が築かれる中、訪韓できることになった。参加者にはLINEグループを通して、ユースアンバサダーとして、両国の友好の架け橋を築けるよう、しっかりと学び、歴史に残る偉業を成し遂げていこうとメッセージを伝えた。

そして帰国後の9月30日には、日本の石破茂首相が韓国を訪問し、首脳会談では、日韓関係を安定的に発展させ、相互往来「シャトル外交」を活性化させていく方針で一致した。

これまで以上に、草の根の交流、顔の見える人と人との信頼関係が重要となる。国境を越えて両国の青年が結んだ友情は、未来への大きな希望となるに違いない。

ハングルのカリグラフィー体験において、ある韓国のことわざを扇子に記した。

「천리 길도 한 걸음부터 (千里の道も一歩より)」

今回の高校生交流が、これからの教育交流、文化交流、民衆交流の意義ある第一歩になることを願っている。



# 受入れ事業報告



## 1. 参加者名簿

### 1) 参加者

|    | 氏名        | 学校               | 地域 |
|----|-----------|------------------|----|
| 1  | イム・リョウオン  | 永信高等学校           | 大邱 |
| 2  | ハン・ヘチャム   | 仁川万寿高等学校         | 仁川 |
| 3  | キム・ダッビョル  | 板谷高等学校           | 京畿 |
| 4  | チャン・ユリム   | 高陽外国語高等学校        | 京畿 |
| 5  | ナム・ジウ     | isol 高等学校        | 京畿 |
| 6  | オ・スンジュン   | 遠宗高等学校           | 京畿 |
| 7  | チャン・ミナ    | 好梅実高等学校          | 京畿 |
| 8  | キム・ジュンミン  | 春川高等学校           | 江原 |
| 9  | ムン・ユンスル   | 雉岳高等学校           | 江原 |
| 10 | パク・クオンビン  | 西帰浦高等学校          | 済州 |
| 11 | キム・チェヒョン  | 花園高等学校           | 大邱 |
| 12 | ファン・ジエ    | 達川高等学校           | 蔚山 |
| 13 | イ・ソンヨン    | 孝亭高等学校           | 蔚山 |
| 14 | ユ・グァンヒョン  | 養明高等学校           | 京畿 |
| 15 | パク・ジュニ    | 北原女子高等学校         | 江原 |
| 16 | ファン・シオン   | 東園高等学校           | 慶南 |
| 17 | ソン・スビン    | 密陽女子高等学校         | 慶南 |
| 18 | イ・スンビン    | 南洲高等学校           | 済州 |
| 19 | チャン・ヨンス   | 済州女子高等学校         | 済州 |
| 20 | イ・ゴヌ      | 金井高等学校           | 釜山 |
| 21 | ハ・チョンウ    | 復興高等学校           | 釜山 |
| 22 | ファン・ヒョナ   | 蔚山外国語高等学校        | 蔚山 |
| 23 | パク・ヘミ     | 三一工業高等学校         | 京畿 |
| 24 | ソ・ユリ      | 佛谷高等学校           | 京畿 |
| 25 | ファン・イエウオン | 桂南高等学校           | 京畿 |
| 26 | チャン・スイン   | 徳溪高等学校           | 京畿 |
| 27 | アン・ソニョン   | 慶尚国立大学師範大学附属高等学校 | 慶南 |
| 28 | チェ・アジュン   | 龍南高等学校           | 慶南 |
| 29 | イ・ミンギョ    | 釜山国際高等学校         | 釜山 |
| 30 | キム・ドンウン   | 惠光高等学校           | 釜山 |

|    |           |           |    |
|----|-----------|-----------|----|
| 31 | チョン・ガオン   | 芝山高等学校    | 京畿 |
| 32 | イ・ヒョンソ    | 広徳高等学校    | 京畿 |
| 33 | ユ・ジイン     | 一山洞高等学校   | 京畿 |
| 34 | ソン・チェジュン  | 始興陵谷高等学校  | 京畿 |
| 35 | カン・ジウ     | 巨済第一高等学校  | 慶南 |
| 36 | キム・イダム    | 明新高等学校    | 慶南 |
| 37 | ヒョン・ギョンミン | 済州外国語高等学校 | 済州 |

## 2) 引率者

|    | 氏名       | 所属              | 地域  |
|----|----------|-----------------|-----|
| 団長 | パク・ジョンラク | 仁川万寿高等学校        | 仁川  |
| 引率 | ペク・ソヒ    | 江原特別自治道教育庁国際教育院 | 江原  |
| 引率 | ソン・ヒジン   | 仁川万寿高等学校        | 仁川  |
| 引率 | イ・ハソン    | 国立国際教育院         | ソウル |
| 引率 | キム・ドイ    | 国立国際教育院         | ソウル |

## 2. 日程

| 日数 | 日付            | 時間            | プログラム  |
|----|---------------|---------------|--|
| 1  | 10月28日<br>(火) | 午後<br>夜       | 成田国際空港到着<br>オリエンテーション  |
| 2  | 10月29日<br>(水) | 午前<br>午後<br>夜 | 訪問：早稲田大学<br>訪問：都立葛飾総合高等学校<br>買い物体験   |
| 3  | 10月30日<br>(木) | 午前<br>午後      | 訪問：関東国際高等学校<br>”<br>自由散策：お台場   |
| 4  | 10月31日<br>(金) | 午前<br><br>午後  | 講義：「日韓国交正常化60周年記念講義」<br>(駐日本国大韓民国大使館 参事官)<br>体験：「狂言体験」(日本芸術文化振興会 狂言師)<br>学習成果発表会 |
| 5  | 11月1日<br>(土)  | 午前            | 成田国際空港出発   |



日韓高校生交流事業韓国団

### 3. 受入事業概要

<10月28日(火)>

#### ○日本到着/オリエンテーション

韓国団はソウルと釜山からの2団に分かれ来日した。釜山からの団は飛行機の遅延トラブルがあったが無事に空港で合流し、宿泊先である日本青年館ホテルへ向かった。ホテル会議室にて本事業のスタッフと各班に帯同する日本人学生サポーターの紹介を行い、日程や発表テーマについて説明を行った。全員で弁当による食事を取った後、韓国団引率者と打ち合わせを行い解散した。

<10月29日(水)>

#### ○大学訪問【早稲田大学】

早稲田大学留学センターの協力のもと、昨年度に続いての訪問となった。早稲田大学はグローバル教育に力を入れており、2032年までに全学生の海外留学(全員留学)と外国人留学生比率20%を目指している。

まず初めに、早稲田大学在籍の韓国人留学生から、大学説明と留学制度について説明があった。その後4名の韓国人留学生を囲んで小グループを作り、座談会を行った。生徒からは日本での生活や学校生活など様々な質問があり、興味深く談義をする様子が見られた。

その後は学食で食事を取り、実際の大学生の食事を体験した。キャンパスツアーは日本人大学生が2グループに分かれて帯同し、案内を行った。大学の様々な歴史ある名所や図書館等を周りつつ、在籍する大学生の様子を見たりと、キャンパスライフをイメージすることができた。案内の最中も韓国人生徒は日本語に挑戦し、大学生へ様々な質問をする様子が見られた。

解散前には、当日が学園祭前日であったこともあり、様々な部活動・サークル生がユニフォーム姿で集い演目のリハーサル等で賑わっており、韓国団生徒が目目を輝かせながらそれを見つめる様子が印象的であった。



## ○高校訪問①【東京都立葛飾総合高等学校】

葛飾総合高等学校では日本の放課後部活動体験を行った。出会いの歓迎式の場面では、日本の生徒たちから盛大な歓迎を受けた。また吹奏楽の演奏も実演され、公立高校として都大会で金賞や銀賞を受賞する実力の演奏に、韓国団は感銘を受けていた。韓国団との交流は、主に韓国語専攻の生徒が対応し、歓迎式の後にはキャンパスツアーが行われ、総合高校ならではの多種多様な分野の教室が紹介された。その後、訪韓団は予め振り分けられた各部活動に分かれ、日本人高校生と部活動を楽しみながら交流を深めた。

部活動は、吹奏楽部、ダンス部、書道部、パソコン部、イラスト部が用意され、日本人生徒が韓国人生徒へ教える姿や韓国人生徒が日本語で様々質問する姿も見られ、これまで培ってきた日本語を試行錯誤しながら挑戦し、コミュニケーションを取る姿が印象的であった。交流を深めた後は、各部活動で意気投合した生徒同士が連絡先を交換する様子も見られ、日本生徒のお見送りを受け、笑顔で解散した。



## ○買い物体験【アリオ亀有】

葛飾総合高等学校を出た後は、近隣のショッピングモール（アリオ亀有）にて、ショッピング体験を行った。家族や友人へのお土産等でお菓子や雑貨、食品等を購入していた。またモールではフードコートにて自由飲食の機会を設け、各班で自由に好きな飲食店で日本食を食べることができた。



<10月30日(木)>

## ○高校訪問②【関東国際高等学校】

関東国際高等学校では、韓国語を専攻する第3学年の日本人生徒とディスカッション交流を行った。進行役の黒澤副校長より事前にディスカッションのテーマ（あなたの学校の校則）が出題され、各自が調べた上で、当日は各グループに分かれ日本人生徒と討議するという流れで実施した。日本と韓国の校則の共通点と相違点を見出し、どのような校則が良いかを各班の両生徒が議論し、合意形成を導き出すことを主眼とした。このディスカッション交流は、生徒たちが今後社会人としてグローバル社会の中で異国の人々と協働していく中で、まず話し合い、相手の考えを知り、双方のメリットを見出し、より良いルールを決めるというプロセスを体験する願いが込められている。韓国人生徒は日本人生徒とディスカッションする中で、日本人の考え方や日本のルールを知る機会になっていた。ディスカッション後の昼食は両国生徒が混じって食堂弁当にて食事を取り、自由にコミュニケーションを取る姿が見られた。

午後は第2学年の日本人生徒主催でレクリエーション交流を行った。日本語の早口ことば遊びや、だるまさんが転んだ等を行い、シンプルな遊びではあるが盛り上がり、両国生徒たちの笑顔弾ける様子が多々見られた。また最後に日本人生徒有志によるダンス発表の出し物が行われたが、音響不良で中々実演できないトラブルが生じた。日本人生徒が困惑し戸惑う状況に陥ったが、韓国人生徒が日本人生徒を励まし、場を盛り上げるなど、トラブルから見せる韓国人生徒の優しさや心意気が非常に印象的で、日本人生徒たちとの友情がさらに深まったように感じた。最後は日本人生徒に見送られながら名残惜しく解散した。



## ○都内自由散策【お台場】

都内自由散策ではお台場のダイバーシティ東京へ訪問した。ダイバーシティ東京は、参加者の管理と食事を含む施設内容の充実さ、日本のポップカルチャー（様々なアニメ関係店舗やカラオケ等）を提供できる観点を考慮し、日本を多分に感じられる場として設定した。団員は各班で思い思いの場所に行き、実際にカラオケを初体験し日本の曲を歌ったり、日本のアニメーションの店舗を見学したりと様々な刺激を受ける様子が見られた。



## <10月31日（金）>

## ○日韓国交正常化60周年記念講義【駐日本国大韓民国大使館】

駐日本国大韓民国大使館の梁参事官から「日韓国交正常化60周年を迎えて」をテーマに講演をいただいた。本年が日韓国交正常化60周年であることを踏まえ、両国の教育・文化交流の歩みを振り返りつつ、今後も日韓両国が友好親善を深め、共に歩み発展する未来に向け、お話いただいた。



また、2024年夏の甲子園大会で京都国際高校が初優勝を果たした試合に、梁参事官も現地へ応援に駆け付けた談話があった。同校の前身は在日韓国人向けの民族学校であり校歌の歌詞も韓国語である。現在は多くの日本人生徒も在籍しており、両国籍の生徒が力を合わせて初優勝を果たしたことに感銘を受けたとの談義が印象的であった。

## ○日本伝統文化体験「狂言体験」【独立行政法人日本芸術文化振興会】

プロの狂言師による狂言体験（ワークショップ）を体験した。講師には野口隆行氏と奥津健一郎氏に來訪いただき、韓国人生徒へご指導を頂いた。日本の無形文化遺産である「狂言」は、日本古来の話を基にした喜劇である。中世の庶民の日常や説話などを題材に、人間の習性や本質をすどく切り取って、大らかな「笑い」や「おかしみ」にしており、今回は江戸時代の盆栽泥棒を面白おかしく作品にした「盆山（ぼんさん）」を韓国団と共に演じた。ユニークに様々な身体を動かす表現、狂言の代表的な笑い表現（笑イ留）を全員で行い、笑顔も溢れる日本文化体験となった。

また講師の奥津氏は韓国人生徒と年齢も近く、同世代の若者講師として様々な質問が寄せられ、終了後には一緒に記念写真を撮る等、交流する様子も見られた。



### ○学習成果発表会

学習成果発表会では、日本での研修と交流を経て感じた韓国との共通点・相違点、日本で印象的だったこと、韓国へ持ち帰りたいこと、両国が共に歩む未来のためにできること等を、各班より発表した。各班の個性の光るスライド資料と発表になり、日本で貴重な体験ができたこと、日本人生徒との交流で絆が生まれたことが伺えた。

発表終了後には、文部科学省国際教育課の大野係長及び当機構理事長から講評があり、最後は韓国団全員と記念写真を撮り、閉会となった。



### < 11月1日(土) >

### ○帰国

韓国人生徒たちは5日間を共に過ごした日本人学生サポーターと涙の別れをし、再会を誓って一行は帰国の途に就いた。



## 4. 学習成果発表会

### 1) 1班

#### 【韓国と日本の違い】

##### <学校生活>

#### ①自転車通学の文化

Q 1. 自転車で通学していますか？

日本： はい 40% / いいえ 60%

韓国： はい 10% / いいえ 90%

Q 2. 周りに自転車通学をしている人が多いですか？

日本： はい 56% / いいえ 44%

韓国： はい 5% / いいえ 95%

Q 3. 自転車で通学する理由は？

- ・歩くより圧倒的に楽だから
- ・風を感じながら自転車に乗るのが好きだから
- ・歩くより速いから
- ・バス代を節約するため

##### <生活文化> 「近い国なのにこんなに違うなんて！」

#### ①食事文化

- ・箸が異なる（韓国は金属製の箸（チョッカラ））

#### ②日本の“迷惑をかけない文化（メイワク文化）”

Q. 日本人学生サポーターへインタビュー

- ・日本は敬語が多すぎて、年上に適切に使うのが面倒
- ・日本は他人に迷惑をかけないよう日常で努力している
- ・電車や学校で他人の目を気にすることが多い

#### ③価格表示の違い

- ・日本のレシート例：税込み表示・免税など（韓国はここまで詳細な表示は無し）

#### ④綺麗な道路

- ・街の道がとても綺麗

### 2) 2班

#### ①日本との共通点

- ・部活動、制服着用、学校行事、言語

## ②相違点

- ・制服デザイン
- ・日本の高校生はアルバイト ⇔ 韓国の高校生は学習塾
- ・日本の高校は弁当持参 ⇔ 韓国は給食が一般的

## ③私たちが考える日本と韓国が進むべき未来

- ・韓国と日本はそれぞれの長所と短所がある
- ・相互補完的な関係の発展が必要！

## 3) 3班

### 【日韓友好の重要性—未来へ進む教育—】

#### ①未来の日韓が抱える課題

- ・少子化・高齢化、人口不足による労働人口の減少、国家競争力の低下

#### ②多様性・創造性教育の重要性

- ・多様性 / 創造性教育 → 未来の人材育成において非常に重要

#### ③早稲田大学での学び「多様性」(留学生)

- ・日本と韓国の両国から多くの留学生、様々な社会的優遇制度  
例：日本の「高度人材ビザ」など

#### ④葛飾総合高等学校での学び「部活動」

- ・部活動とは生徒が自主的に参加し、協力・コミュニケーション・自己表現を学ぶ教育の一形態。部活動＝未来社会が求める人材を育てる“小さな学校”

#### ⑤日韓の部活動の違いと多様性

<日本>

- ・スポーツ系・文化系・奉仕系など多様、葛飾総合高校には26もの部活
- ・日本の部活動の歴史 1968年の学習指導要領改定で正式化  
1972年に部活動設置が義務化 → 活性化  
大学入試の面接でも重視 → 参加率上昇

<韓国>

- ・入試中心の部活動が多い。しかし、生徒が主体となり個性を發揮できる部活もある  
例：創意発明部、カフェ部、メディア部

#### ⑥創造性を育てる部活動

- ・部活動＝教科書にはない実践的な学びの場  
生徒は自ら目標を設定。協力して問題解決に挑戦。

<日本>

- ・ロボット部、美術部、軽音楽部など多くの創造的活動

<韓国>

- ・科学・デザイン・公演など創造力を発揮できる部活動が存在

#### 【日韓が進むべき未来（結論）】

##### ○結論

- ・部活動中心の教育 → 多様性・創造性を育てるために重要
- ・日韓は、お互いの文化と学習方法を理解し協力すべき

#### 4) 4班

#### 【話し合いながら発見した私たちの未来 ～対話の中で見つけた私たちの未来～】

##### ①高校での感想

- ・生徒へのサポートが手厚い
- ・部活動（放課後の活動）が活発である

##### ②早稲田大学での感想

- ・留学生へのサポートが手厚い
- ・英語プログラムも充実している

##### <考察>

「韓国と日本にこうした違いがあるのはなぜだろう？」

##### ④日韓の入試制度の違い

- ・日本：大学入学共通テスト  
推薦入試
- ・韓国：随時入試（学生生活記録書（成績）中心の選考、総合型選考、論述選考）  
定時入試大学修学能力試験（韓国のセンター試験）

##### ⑤留学生受入れの違い

- ・早稲田大学（日本）
- ・成均館大学（韓国）  
(両大学ともに留学生受入れが充実しているが体制や校風、制度が異なる)

## 5. 学生サポーター感想

訪日団が同年代の日本人と交流する時間と日本語の実践の機会を十分に確保するとともに、各班の安全管理や様々な支援ができるよう実施期間中に5名の日本人学生が学生サポーターとして帯同した。

(1) まずはこのような素晴らしい機会に参加することができ、とても感謝しています。

私は韓国語が全く分からない中での参加で初めは緊張していましたが、韓国の高校生の皆さんが私よりも不安だと思っ中で優しく接してくれたことにとっても心を打たれました。日本の高校の訪問であったり、文化に触れたり韓国と韓国の高校生が日本に触れていく過程で私自身も日本、韓国の素晴らしさであったり、国を超えた交流の中で言語の壁を感じさせないコミュニケーションを見ることができました。

また今回の事業で一番心に残っているエピソードは、高校生と一緒にエスカレーターに乗っている時に「本当に楽しい。ありがとう。」と言われたことで、今でも覚えています。別れの時はサポーター皆で生徒たちが泣きながら帰るのを見届けていました。それだけ彼らにとってもかけがえのない時間になっていたのだと思うと、今回関わることができ本当に良かったです。

この経験は私の人生の中でも大きな経験となりました。改めて関わっていただいた皆様に感謝申し上げます。

(2) この五日間を通して私は、多くの初めてを経験できた。サポーターとして不安な気持ちも大きかったが、韓国の高校生の方から日本語で一生懸命話しかけてくれたことや多くの方々の支えもあり、充実したものになった。韓国の高校生たちが積極的にコミュニケーションを取る姿、日本を楽しみながら文化や考えの違いに気づき、学びを取り入れている姿が印象に残っている。その意欲と好奇心あふれる姿にとっても感銘を受けた。今回の事業で「もっと韓国語を話すことができたら」と惜しむ思いも大きかったが、その分韓国についてこれから学びたい、知りたいと思う気持ちが高まった。国際交流を通して、今まで当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかったことを実感し、自分の考えを改める機会になった。

大学生最後の年でこのようなかけがえのない経験をし、たくさんの人に巡り会えたことに感謝している。いつまでも挑戦する気持ちを忘れず、毎日を過ごしていきたいと思う。

(3) 今回の交流事業で初めて会う生徒たちに自分から話しかけることに対して不安を感じていましたが、韓国の高校生達の方から温かく迎えてくれたおかげですぐに打ち解けることができました。活動の中では、私が韓国語を分からないため、韓国の高校生たちが困っている場面にすぐ答えられないことがあり、言葉が通じないもどかしさを感じました。自分をもっと韓国語を知っていれば、相手の不安を早く解消できたのではないかと思うと悔しさも残りましたが、その経験がきっかけで韓国語

を学び、自分の言葉でコミュニケーションが取れるようになりたいと思いました。しかしジェスチャーや、翻訳アプリなどを使って一生懸命伝えようとすると相手も理解しようとしてくれ、気持ちが通じ合う場面が多く、言語の壁を越えて繋がれたのはすごく嬉しかったです。事業後、韓国の高校生たちから「すごく楽しかった」「また日本に来たい」といったメッセージが届き、サポートする側として参加していた自分にとって、その言葉は何よりも嬉しかったです。またこのような事業に参加したいと思いました。

- (4) 日韓交流事業、とても楽しかったです。参加者として活動することはあっても、サポーターとして、学生のうちから関わらせていただく機会は貴重で、とても良い学びを得ることができました。生徒さん達とどのように関わっていくか、どうサポートすべきか、ボランティアメンバーと試行錯誤しながら、自分としても成長することができました。高校生たちが新しい発見と勉強してきた知識を絡めながら、価値観をアップデートしていく瞬間を、一番近くでみることで嬉しかったです。徐々に文化の違いに慣れて、だんだん打ち解けてくれる姿をみていると、机に向かっているだけでは得られない学びがあることを再認識しました。そして、仲間と協力しながら素晴らしい発表を見せてくれた高校生たちの姿から、気力と自信を分けしてもらいました。彼らが今持つ豊かな感性と、冴えた知性を、生かせる環境にずっといて欲しいと思います。みんな元気でいて欲しいな。またこのような機会があれば、ぜひ参加させていただきたいと考えています。5日間、本当にありがとうございました。
- (5) 日韓高校生交流のボランティアに参加し、言葉や文化の違いを超えて心が通じ合う瞬間を何度も感じた。最初はコミュニケーションに不安があったけれど、笑顔や身振り、簡単な韓国語や日本語だけでも気持ちは十分伝わることを実感した。活動を通して、自分とは異なる価値観を持つ相手に対して、まず受け止め、尊重する姿勢の大切さを学んだ。また、日本に興味を持って積極的に話しかけてくれた姿を見て、こちらも相手の文化をもっと理解したいという思いが強くなった。短い期間だったにもかかわらず、共に悩んだり笑ったりしながら過ごした時間はとても濃く、自分の視野を広げる大きなきっかけになった。この経験で得た学びやつながりを、今後の人との関わりや将来の進路選択にも生かしていきたい。

## 6. 成果と課題（国際・企画課）

### （1）企画について

受入れ事業においては、本事業の最も重要なプログラムである高校交流に重点を置いた。今年度はディスカッション交流に加え、昨年度参加者の声で多く挙げた部活動体験を取り入れ、2校訪問することとした。日本ならではの部活動を体験し、より多くの高校生と交流することで日本語に挑戦する機会を増やすこと、また多様な活動を通じてコミュニケーションを促進し、多くの日本人との友情を育むと共に、日本人の考え方に触れ、他文化理解を促進することを図った。

また全体構成として、事業目標である「異なる価値観や視点を尊重しながら、日本と韓国への理解を深め、将来両国の架け橋となるような存在を目指す」に繋がるプログラム企画に努めた。

ディスカッション交流においては、「3. 受入事業概要」で前述したとおり、両国生徒に身近なテーマ課題（校則）を与え、事前に調べた上で当日話し合う流れとした。両国の共通点や相違点を見出し、その上で「理想のルール」を決めるディスカッションを行い、考え方の違う他国の学生同士が合意形成を図るプロセスを設けた。このプロセスが、将来のグローバル社会において、未来志向で他国の人々と共により良い合意形成を図る際の学びになることを狙った。

日本文化体験については、日本芸術文化振興会が当機構のオリンピック記念青少年センター内に養成所と事務所を構えていることから、これまでに実施例のない日本無形文化財の「狂言体験」を間近で見学し、演目の体験をすることができた。

生活面においては、前年度お弁当と食堂食のみだった飲食について、参加者意見を基に、今年度は自由な飲食の機会を2回設定した。また都内自由散策は、安全管理面を重視した上で、日本のポップカルチャーを感じられるお台場（ダイバーシティ東京）とした。施設内は参加者の関心が高い日本のアニメやキャラクター、カラオケ等の店舗が網羅されており、より日本文化を体感できることを狙った。

成果発表会のテーマについては共通点、相違点のみとせず、できる限り未来志向で日韓友好のためにできることを踏まえた発表内容となるように設定した。

各班付きの学生サポーターの取組は今年度も継続して実施し、各班の安全管理や身の回りのサポートに加え、5日間絶えず日本語を使う機会を設け、同年代の日本人と深い交流ができるようにした。

### （2）成果

事業全体の満足度のアンケート結果は100%（肯定評価）を獲得することができた。また最も満足度の高かった活動の設問では、7割の生徒が「高校交流」を挙げていた。特に葛飾総合高等学校の部活動交流の満足度が高く、参加者の声として「日本の部活動を体験できたことが印象的だった」、「最も近い距離で日本生徒と交流することができた」、「友達との親睦を深め、より短い時間でも仲良くなれたと感じた」「韓国と日本の違いや共通点を明確に理解でき、多くの会話を通じてお互いを理解することができた」等、

同世代の生徒との直接交流が、多くの気付きと学びをもたらすと共に両国の若者の友情が築けたことが伺えた。また部活動へ関心の強い班は、日本特有の部活動の教育的効果や意義を他国目線で分析し、成果発表する班もあった。解散前には多くの生徒が連絡先を交換する様子も見られ、本事業終了後も交流の輪を広げ、今後も日韓友好のためにより一層親善を深めることを期待したい。

その他、伝統文化体験については、「個人や旅行では決して体験することができず、日本文化を感じられる貴重な体験であった」という声や、早稲田大学訪問では、「日本への留学計画のイメージを立てることができた」等、各活動で学びを得られていることが伺えた。

また多くの生徒がプログラムとは別に、5日間付き添った学生サポーターへの感謝の言葉を述べていた。身近なお兄さんお姉さん役として常にサポートし、交流を深めた学生サポーターと空港での涙の別れはとても印象的であった。このサポーターとの交流も日本人の考え方や思いやりに触れ、異文化理解や友好親善に繋がる非常に良い機会になったと考える。

### (3) 課題

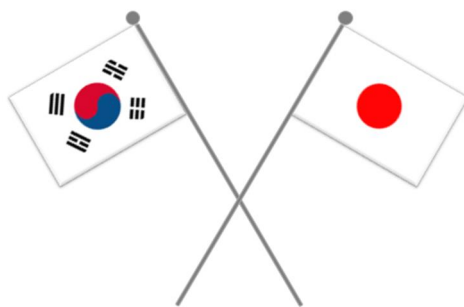
引率者からの意見として、①全員での外食の場の設定、②飲料の提供が挙げられた。①については、団として食事する場を増やして欲しいという意見であり、今回は各班での自由飲食の機会を2回設けたが、その内1回は団全員で日本ならではの料理（もんじゃ焼き等）を体験できるよう要望があった。また②については、日本からの訪韓団に毎朝飲料を提供していることが判明した。プログラム検討の際に両国双方で、できる限りの調整を図りたい。

参加者からの意見としては、①早稲田大学での交流時間の延長、②発表準備時間の確保、③他の班との交流が挙げられた。①と②については、全体プログラム構成を調整し、できる限り改善要望に対応できるよう努めたい。また③については、事前研修時や来日後のオリエンテーション時にアイスブレイクを入れて他班の生徒とも話すきっかけを作る事例もあるため、相手国機関と調整し検討していきたい。

また引率者の役割について、韓国団引率者と直接コミュニケーションを取る中で、相手国実施機関の事前説明・役割が欠如していることが判明したため、今後は相手国担当者と密にすり合わせ、引率者の役割と業務を両国で平準化し、より良い事業運営に努めたい。また両国共に早期でプログラムを確定させること、その上で両国の要望による最終調整を行い、参加者への事前案内や準備のゆとりをもたせることで、さらに質の高い交流プログラムの実施に繋げたい。

### (4) 謝辞

最後に、各訪問先のご担当者、講義・指導をいただいた講師や関係者の方々をはじめ、全日程帯同いただいた通訳の方々や学生サポーター等、事業運営に携わってくださった皆様のご尽力のおかげで、有意義な研修を実施することができた。本事業にご協力いただいた全ての方々に心より謝意を表したい。



令和7（2025）年度 文部科学省委託事業「青少年国際交流推進事業」  
日韓高校生交流 事業報告書

---

令和8年3月発行

編集発行



独立行政法人 国立青少年教育振興機構 子どもゆめ基金部 国際・企画課

<https://www.niye.go.jp> <https://ie-program.niye.go.jp/>

〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1

TEL 03-6407-7733

---

本報告書は、文部科学省の委託事業「青少年国際交流推進事業」として、独立行政法人国立青少年教育振興機構が実施した令和7（2025）年度「日韓高校生交流事業」の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続が必要です。